

『綴り方倶楽部』の研究(1) 発行状況の確認を中心として

太郎良 信*

A Study of the Monthly Magazine “TSUZURIKATA-KURABU” (1)

Shin TAROURA

要 旨

千葉春雄主宰『綴り方倶楽部』(1933年4月創刊, 東宛書房)は小学校の児童と教師を読者対象とする月刊雑誌であり, 1930年代から40年代初頭にかけての生活綴方運動において, 児童にとっては綴方や児童詩の学習教材として, 教師にとっては綴方教育実践の交流の場として重要な役割を担ったものである。だが, これまで終刊時期すら不明のままにされてきたことにみられるように, その全貌は明らかにされてはいない。

本稿は『綴り方倶楽部』に関する先行研究の到達点と問題点の検討を通して全貌解明の必要性を明らかにするとともに, 『綴り方倶楽部』についての現段階での調査を踏まえて同誌の発行状況を概観したものである。

本稿において, 『綴り方倶楽部』は1933年4月号以降, 1937年7月から1938年1月までの7ヶ月の休刊期間をはさんで, 1942年4月号まで少なくとも通算99号が発行されたことを明らかにした。また, 改題後継誌『学芸少国民』と再改題後継誌『少国民文学』の発行状況についても言及した。

はじめに

千葉春雄主宰『綴り方倶楽部』(東宛書房)は小学校の児童と教師を読者対象として1933(昭和8)年4月に創刊された月刊雑誌である。同誌は, 1930年代から40年代初頭にかけての生活綴方運動において, 児童にとっては綴方や児童詩の学習教材として, 教師にとっては綴方教育実践の交流の場として, 重要な役割を担ったものである。

同誌の主宰者・千葉春雄(1890~1943)は, 1929年に東京高等師範学校附属小学校訓

導を依願退職して, 教育ジャーナリズムの世界に入り, 生活綴方運動においてリーダーの役割を担った人物の一人である⁽¹⁾。

その千葉の業績にかかわって, 波多野完治が次のように述べたことがある。

「この人はつずり方思想史という見地からよりも, つずり方事業史の方から重視しなければならない。この人のやった事業は結局において失敗であったらしいが, その文化的意義は大きい。昭和六, 七年以後のつずり方史は, この人のやっていた雑誌をぬきにしてはブランクである。⁽²⁾」

波多野は, 1930年代から40年代の生活綴方教育史を明らかにするためには千葉が関与し

*たろうら しん 文教大学教育学部

た雑誌の検討を抜きにはできないことを指摘しているのである。

1930年代の千葉は、出版社・厚生閣の編集顧問となり、教師対象の月刊雑誌『教育・国語教育』（1931年4月創刊、厚生閣）の主幹をつとめる傍ら、出版社・東宛書房を設立し⁽³⁾、1933年4月に『綴り方倶楽部』を創刊している。その他、千葉が主宰した雑誌には、『教育北日本』（1930年6月創刊、羽陽社）、『尋一教育実際研究』『尋二教育実際研究』（1933年4月創刊、三教社）、『教育東西南北』（1935年4月創刊、東宛書房）などがあるが、いずれも刊行期間が短く、また直接に綴方教育に関わる雑誌でもない。したがって、波多野が言及している雑誌は具体的には『教育・国語教育』と『綴り方倶楽部』のことであるとみてよい。そして、その二つの雑誌のうち、『教育・国語教育』については、1987～88年に全巻の復刻がなされている⁽⁴⁾。しかし、『綴り方倶楽部』についてはその全体像が不明なまま今日に至っている。

本研究は、『綴り方倶楽部』の全体像を解明し、同誌が1930年代から40年代における生活綴方教育運動の展開に果たした役割を明らかにしようとするものである。ただし、のちにみるように、『綴り方倶楽部』の大半が散逸したままであること、そうした状況のなかで『綴り方倶楽部』について記憶や推測をもとに論じられてきたという問題が横たわっている。

筆者は『綴り方倶楽部』の調査を進めてきているが、現時点においても全冊の確認には至っていない。ただ、1942年4月号（第10巻第1号）が終刊号であることを現本をもって確認することによって『綴り方倶楽部』の終刊時期を確定することが可能となるなど、一定の成果を得ている。

本稿では、『綴り方倶楽部』調査の結果を踏まえて、まず、『綴り方倶楽部』に関する先行研究の到達点と問題点を検討し、次い

で、『綴り方倶楽部』の発行状況についての概観を示していくこととする。これは、『綴り方倶楽部』の全体像を明らかにしていくための基礎的作業としての意味をもつものである。

1 『綴り方倶楽部』に関する先行研究の検討

『綴り方倶楽部』は大半が散逸したままであるにもかかわらず、同誌に言及する研究がある。それは『綴り方倶楽部』1936年2月号から1940年5月号まで北原白秋が児童詩の選評を担当した際の該当部分の大半が北原白秋著『児童詩の本』（1943年、帝国教育会出版部）に再録されていることによるところが大きい⁽⁵⁾。たとえば『『赤い鳥』と『綴り方倶楽部』を通読してきて私が最も面白いと思った児童自由詩は⁽⁶⁾』というようにあたかも『綴り方倶楽部』に即したかのような論述がなされる場合においても、実際には『児童詩の本』に再録された限りでの『綴り方倶楽部』の児童詩と選評を指しているにすぎない。ここでは、そうした類のものは除外し、『綴り方倶楽部』そのものについて言及した先行研究について検討をおこなってみたい。

(1) 松本正勝の証言的記述

1952年の時点で『綴り方倶楽部』について証言的に述べたものに、松本正勝の「千葉春雄と『綴り方倶楽部』⁽⁷⁾」がある。これは、『綴り方倶楽部』の編集者であった松本が、千葉との出会いや同誌の編集者となる経緯、編集上のエピソード、同誌に協力した教師たちの氏名、『綴り方倶楽部』の果たした役割などについて明らかにしたものである。しかし、松本自身が『『綴り方倶楽部』そのものよりも、それを機縁としたものに触れすぎたようである⁽⁸⁾』と認めているように、『綴り方倶楽部』そのものについての情報はきわめて少ない。そのことは『綴り方倶楽部』の創刊年月や終刊年月についてさえ一切言及がな

いことに象徴されている。それは、松本が『綴り方倶楽部』に協力した教師たちの名前を列挙する際に「戦災の余禍を受け、記録とすべき一切を焼失し、思い出すままを書きつらねた⁽⁹⁾」としていることからうかがえるように、すべて記憶にのみ依拠せざるを得ないという条件の下で書かれたものであったためである。

その後、1958年に松本は「『綴り方倶楽部』=千葉春雄⁽¹⁰⁾」を執筆している。これは事典の項目として書かれたものであるが、実際には証言的な性格をもつものである。創刊については「高等師範学校付属訓導をすてた千葉春雄が、独力、東宛書房をおこし、最初に手がけた児童綴方雑誌で、一九三三(昭和八)年四月号を第一巻・第一号とした。つとに、全国の綴方実践人を賞揚してきた彼は、ここに、その実践の全国的流通と、文・詩指導の確立を祈念した⁽¹¹⁾」としており、ここでは創刊の年月について明確にしている。また、『綴り方倶楽部』の内容に関して次のように述べている。

「子どもの心理性を尊重し、文芸的なニュアンスが強かったが、しだいに、実験・観察・調べることなどによる綴方、社会事象への肉迫把握と、生活化・社会化の志向を強めていった。実験観察主・調べる綴方などの「理論と指導実践工作」の臨時増刊号は、その傾向のあらわれである。児童詩の選者は、はじめ百田宗治、のち北原白秋。多くの若い実践人の文・詩話その他を多くのせた。表紙は、終刊まで武井武雄の高弟福与英夫であった。教師向「文集廻国」は、文集熱を高め、全国交換が起こり、着実な実践人尊重の気風をつくった。⁽¹²⁾」

下線 で具体例として挙げられている『綴り方倶楽部』の臨時号には、『調べる綴り方資料 小学生動物園号』(1933年9月)、『調べる綴り方の理論と指導実践工作』(1934年3月)、『新童詩の理論と指導実践工作』

(1934年5月)、『実験観察主の調べる綴り方』(1934年10月)の4冊がある。これらは創刊1年目の半ばから2年目の半ばまでに発行されたものであり、『綴り方倶楽部』の初期の動向を示すものである。

下線 では、百田と白秋のそれぞれが担当した期間について具体的には明らかにされていない。

下線 では終刊が何時であったかということについて一切言及されていない。

下線 の「文集廻国」は1933年5月号から1934年9月号まで17回にわたって連載されたものであり、これも創刊1年目から2年目半ばまでの動向を示すものである。

つまり、ここでの叙述は、下線 にあらわれているように創刊間もない時期の動向を念頭においたものであるということである。下線 は他の期間にも及ぶものではあるが具体的な時期については明らかにされていない。この時点においても、松本は『綴り方倶楽部』の現本に即して叙述する状況にはなかったとみられるのである。

(2) 横須賀薫の把握

1975年には横須賀薫の「『綴り方倶楽部』⁽¹³⁾」が出された。これは、事典の項目として執筆されたものである。

「[内容]千葉春雄のつくった出版社東宛書房の最初の事業として、1933(昭和8)年4月創刊。投稿詩文の選評は最初は綴方が千葉、児童詩が百田宗治であったが、前者の仕事のほとんどは松本正勝があたり、後者は36年2月から北原白秋に交代した。これは40年の終刊まで続いた。月刊で7000部程度が発行された。36~37年ごろで一冊30銭。(以下略)⁽¹⁴⁾」

下線 では創刊時から百田が児童詩の選評を担当したかのように記されているが、正確なものではない。1933年4月号(創刊号)の選評は千葉の「児童の作品を語る」であり、

「綴り方篇」「児童自由詩篇」からなるものである。また、5月号から7月号までの児童詩の選評は無署名である。7月号において「百田宗治先生を8月号より本誌詩欄にお迎えいたします」という予告記事が出され⁽¹⁵⁾、8月号から百田による児童詩の選評が始まることとなるのである。

下線 にある、1936年2月号から児童詩の選評者が白秋になったこと、そして1940年まで（正しくは1940年5月号まで）白秋が担当したことは事実である。しかしながら終刊を「40年」とみるのは事実と反する。『綴り方倶楽部』の終刊号は1942年4月号であるためである。したがって、終刊についての誤りがあるとともに、白秋が児童詩の選評者を降りた後の児童詩の選評者についての叙述も欠落しているということとなる。

下線 においては、1936～37年頃の定価として30銭としている。そのこと自体は誤りではないが、この時期に限らず『綴り方倶楽部』の通常号の定価は創刊号から1938年5月号まで30銭であり、1938年6月号から40銭に値上げされたあとはそれが終刊まで続く。さきのように時期を限定して定価を示すことは1936～37年以外の時期の『綴り方倶楽部』の確認がなされていないことを示唆している。

もっとも、1936～37年頃に限ってみても『綴り方倶楽部』の動向を把握しているとはいえない。なぜなら『綴り方倶楽部』は1937年6月号発行の後7ヶ月間の休刊に入るのであり（1938年2月号より復刊）、1937年後半は定価の問題以前に雑誌そのものが発行されてはいないのである。

さらには、『綴り方倶楽部』と『教育・国語教育』との関係についても、不正確な叙述がある。

「千葉春雄が主宰した児童向けの綴り方、児童詩の商業雑誌。出版社は別であるが『教育・国語教育』誌の子雑誌の役割をもつ

⁽¹⁶⁾」

下線 では、『綴り方倶楽部』を『教育・国語教育』の子雑誌として位置づけている。『綴り方倶楽部』を創刊する際に、千葉が「綴り方倶楽部はある意味に於て、『教育・国語教育』の姉妹雑誌でもある⁽¹⁷⁾」という位置づけをしたことはたしかである。しかし、千葉が『教育・国語教育』の主幹であったのは1937年7月号までであり、翌月号以降の『教育・国語教育』と千葉は無関係である⁽¹⁸⁾。また、千葉は『教育東西南北』の改題後継誌『日本文化と国民教育』（1936年8月創刊、東宛書房）を再改題して、1937年6月に『綴り方倶楽部』の親雑誌⁽¹⁹⁾として『綴り方雑誌』（東宛書房）を創刊したが、これは創刊号のみで廃刊となった。

他方、『綴り方倶楽部』は、さきにも言及したように1937年6月号でもって休刊となったものの1938年2月号から復刊し、1942年4月号までほぼ定期的に発行されていくのである。

したがって、『綴り方倶楽部』は、その創刊から1937年6月号までの4年3ヶ月の間は『教育・国語教育』の子雑誌であったとしても、復刊した1938年2月号から1942年4月号までの4年2ヶ月の間は親雑誌をもたない単独の雑誌として発行されているのである。つまり、『綴り方倶楽部』刊行期間のうちの後半は親雑誌をもたない単独の雑誌として発行されたのである。したがって、『綴り方倶楽部』を『教育・国語教育』の子雑誌としてとらえるのは、少なくとも『綴り方倶楽部』の後半期に関しては事実と即したものとはいえない。

以上を総合してみると、横須賀の把握は、主として1936年から1937年半ばあたりまでの『綴り方倶楽部』に即したものとということとなる。

(3) 畑中圭一の把握

1994年には畑中圭一の論文「児童詩をめく

る白秋と「生活詩」派⁽²⁰⁾」が出された。その「二 『綴り方倶楽部』における北原白秋」の冒頭に次のような叙述がある。

「北原白秋が雑誌『綴り方倶楽部』の児童詩の選者となったのは一九三六(昭和一一)年二月号からである。『綴り方倶楽部』はその三年前、一九三三年四月に千葉春雄の編集・発行により創刊された。当初の選者は百田宗治であったが、一九三五年百田がみずから雑誌『工程』を創刊したのを機会に選者を降り、その後は国分一太郎や寒川道夫らが分担していた。それから約一年後に白秋が選者として招かれたのである。⁽²¹⁾」

下線 が正確なものではないことは、すでに下線の検討において明らかにした。下線には、虚構というほかはないものが含まれている。下線の場合、百田が1935年4月に『工程』(椎の木社)を創刊したこと自体は事実であるが、その時点で『綴り方倶楽部』の選者を降りたわけではなく、引き続き『綴り方倶楽部』1936年1月号まで百田が児童詩の選者をつとめているのである。したがって、百田に代わって国分一太郎や寒川道夫のような教師たちが児童詩の選を担当したかのようにとらえている下線も事実と反する。もっとも、百田に代わってではなく、百田の選と並行して教師たちが『綴り方倶楽部』の児童詩の選をおこなったという事実はある。具体的に述べれば、百田が選をする「子供の詩」欄とは別に1935年1月号から「課題詩」欄が設けられ、稲村謙一(鳥取)、近藤益雄(長崎)、吉田瑞穂(東京)、国分一太郎(山形)、磯長武雄(鹿児島)、深川二郎(東京)の6名の教師が交代で選を担当したのであり、これは白秋が「子どもの詩」欄の選者になった翌月の1936年3月号まで続いている。なお、畑中は寒川の名を挙げているが、この時期に寒川が選を担当した事実はない⁽²²⁾。以上の経緯から自ずと明らかとなるように、百田から

白秋へと交代する間が約1年間あったとする下線も事実と反する。

以上を総合すると、畑中の把握は、『綴り方倶楽部』創刊号から1936年2月号までの状況について触れているようにみえるものの、実際には『綴り方倶楽部』に即さぬままになされたものというほかはない。

2 『綴り方倶楽部』の発行状況

さきに見たように、『綴り方倶楽部』についての研究はきわめて遅れた段階にある。ここでは、改めて『綴り方倶楽部』発行状況の確認をととして『綴り方倶楽部』の概観を試みることにする⁽²³⁾。

ただし、第4巻までの論述と第5巻以降の論述では、その方法において若干の差異を余儀なくされている。第4巻までは休刊することなく毎月発行されていること、そして現段階においてほぼ完全に現本が確認できる状況にあり、発行状況の把握が比較的容易であるのに対して、第5巻以降では休刊があるなど発行状況に変動がみられること、あわせて現本未確認の号が残されていることによるものである。

(1) 第1巻(1933年度)

第1巻は1933年4月号(第1巻第1号)より1934年3月号(第1巻第12号)まで通算12号発行されている。4月号は菊判112ページであり、定価30銭である。表紙の上部に「千葉春雄 選・輯」の文字がある。また、7月号より「昭和八年五月十九日第三種郵便物認可」を受けている。部数に関しては、5月号に「七月までには読者一万を獲得しようとする意気ごみです⁽²⁴⁾」ということばがある。

(2) 第2巻(1934年度)

第2巻は1934年4月号(第2巻第1号)から1935年3月号(第2巻第12号)まで通算12号発行されている。4月号は菊判120ページ

であり、前年4月号に比して8ページ増である。部数に関しては、10月号に「倶楽部愛読者六千⁽²⁵⁾」ということばがある。

(3) 第3巻(1935年度)

第3巻は1935年4月号(第3巻第1号)から1936年3月号(第3巻第12号)まで通算12号発行されている。4月号は菊判144ページであり、前年4月号に比して24ページ増である。この号には別冊付録『綴方勉強事典』(付録としてのみならず、別途1冊10銭で頒布)が付けられた。そうした特典があったためか「4月号は、おそらく、二万に達するのではないかと思ふ⁽²⁶⁾」という反響があったようである。

ただし4月号以外の部数は、11月号にある「今、本誌の倍加運動をやつてをります。それが実現すれば、二万近くなります⁽²⁷⁾」ということばをそのまま受け取れば1万弱ということとなる。

なお、1936年2月号から白秋が児童詩欄の選者となり、表紙の上部の文字は従来の「千葉春雄・選・輯」から「北原白秋・千葉春雄選」に改められている。

(4) 第4巻(1936年度)

第4巻は1936年4月号(第4巻第1号)から1937年3月号(第4巻第12号)まで通算12号発行されている。

4月号は菊判144ページであり、前年4月号と同じである。ただ、6月号は152ページであり、これは通常号としては『綴り方倶楽部』全号を通してもっともページ数の多いものとみられる。これは通常の記事に加えて白秋の「提言」が8ページにわたって掲載されたことも要因であろう。

(5) 第5巻(1937年度)

第5巻には、長期の休刊や巻号記載の欠落などがある。

4月号(第5巻第1号)は菊判136ページであり、前年4月号に比して8ページ減である。

4月号から6月号(第5巻第3号)までは毎月発行されているが、7月号から予告もないうまま休刊となる⁽²⁸⁾。休刊の直接的理由は、東宛書房が資金繰りに行き詰まったためであった。その時期に、千葉は次のように記している。

「東宛書房創始以来、恐らく経営の不手際からであらうがすでに五万の借金をしてゐる。(中略)この五月十日、とうとう東宛書房は、取引銀行を解約せねばならぬ破目になった。⁽²⁹⁾」

その後、『綴り方倶楽部』は7ヶ月間の休刊を経て1938年2月号より復刊する。2月号は104ページで、4月号に比して32ページもの減となっている。

同号には、復刊に際して、次のように書かれている

「苦しい半年であつた、本誌こそはどうしても、と考へてみたのだが、ついのびのびになつてしまつた。(中略)幸に当書房も、はじめて見通しがつき、基礎も確立してきたのであることを喜んでいただきたい。⁽³⁰⁾」

復刊後の『綴り方倶楽部』は第三種郵便物認可が取り消されている。また1938年2月号と3月号のいずれにも巻号が付されていない。だが、1937年6月号(第5巻第3号)に続くものであり、ここでは2月号を第5巻第4号、3月号を第5巻第5号とみなすこととする⁽³¹⁾。そうすると、第5巻は1937年4月号(第5巻第1号)から1938年3月号(第5巻第5号)まで通算5号が発行されたということとなる。

また、休刊前に表紙の上部に掲げられていた「北原白秋・千葉春雄選」の文字は、復刊を機に「千葉春雄・北原白秋 選・輯」と順序が改められている。

(6) 第6巻(1938年度)

第6巻にも、休刊や巻号記載の乱れがある。

4月号(第6巻第1号)は菊判102ページであり、2月の復刊時に比して2ページ減、前年4月号に比して34ページ減である。

この4月号から「昭和十三年三月十五日第三種郵便物の認可」となり、9月号(第6巻第6号)までは毎月発行されたが、10月号は休刊した。11月号(第6巻第7号)の表紙は、「10月」と印刷されたところに「11月」と重ね刷りをするという修正が施されたものであり、10月号に予定していた表紙を手直して11月号に流用したことがわかるものである。その11月号の「編集後記」には、10月号の休刊について次のように記されている。

「たうたう、十月号は休刊にした。紙の不足と、印刷所の都合にて、どうしても、25日発行のものを五日発行に早めることが不可能に近いので思ひ切つたのだ⁽³²⁾」

その後、12月号(第6巻第8号)から1939年3月号まで毎月発行されているが、1月号以降において巻号の表記が扉と表紙との間で異なるという乱れが生じている。たとえば、1月号は扉では第6巻第9号、表紙では第7巻1号とあり、扉では前年4月から継続する巻号、表紙では1月でもって巻を改めた巻号が用いられている。第5巻までの『綴り方倶楽部』はすべて4月号で巻数を改めていたことを考慮して、ここでは扉の巻号表記を採用していくこととする⁽³³⁾と、第6巻は1938年4月号(第6巻第1号)から1939年3月号(第6巻第11号)まで通算11号発行されたということとなる。

5月号の折り込み「定価改正予告」に、物価上昇を理由として6月号から40銭への値上げが予告され、予告通り6月号から実施された。その6月号から表紙の左下に「この雑誌を皇軍慰問に送つて下さい」という文字が入り始めた。これは9月号(第6巻第6号)に

はないが、11月号(第6巻第7号)まで続いている。

(7) 第7巻(1939年度)

第7巻にも、休刊や巻号記載の乱れがある。

1939年1月号から生じていた扉と表紙の巻号表記の乱れは、1939年12月号まで続いている。たとえば、1939年4月号は扉では第7巻1号、表紙では第7巻第4号と表記されている。ここでは、第6巻の場合と同様、扉の巻号表記を採用して、1939年4月号を第7巻第1号とみることとする。

4月号(第7巻第1号)は菊判120ページであり、前年4月号に比して18ページ増である。

4月号から12月号(第7巻第9号)までは毎月発行されている。その後に発行されたものは1940年2月号(第7巻第10号。本号以降は扉と表紙の巻号表記が一致する)であり、1940年1月号は休刊とみられる。2月号の巻号表記が1月号を飛ばしたものであること、2月号の「編集後記」に次のように書かれていることによるものである。

「遅刊の弁を、まづ申し上げなければならぬ。その重なる原因は、紙と印刷所と資力である。資力も勿論、前もつてご承知の通りであるが『倶楽部だけは、どんなことがあつても継続して行く意志がある』のだからそのつもりになりさへすれば何とかなる。然し何ともならないのは、紙と印刷所である。印刷所の方は、軍需景気による人不足が関係してゐるのだ。だから、原稿は渡つてあるのだが、組まうにも、活字を組めぬのだ⁽³⁴⁾」

1940年3月号の発行の有無は不明である。北原白秋著『児童詩の本』の「昭和十五年」の項では「一月」はなく(これは同号を休刊と見ることと矛盾はない)、「二月 第七巻・第十号」の再録があり、「三月」はない。これは3月号に白秋の児童詩の選がないことを

示しているが、それが休刊によるものか休載によるものかは不明である。

したがって、現時点では、第7巻は1939年4月号（第7巻第1号）から1940年2月号（第7巻第10号）まで通算10号発行されたことが確認できるということにとどまる。

部数に関しては、5月号に千葉が次のように書いている。

「八百増へれば、本誌の経営もまづ楽になる。(中略)八百をうるために、現在の読者の方の中五人か四人かで、一冊の本誌を消化していただけたら、たちどころに八百はできるわけなのだが⁽³⁵⁾」

読者が4人が5人かで1冊拡大すれば800冊拡大となるということをもとに計算すると、実売部数は3200部から4000部の間にあったということとなる。

(8) 第8巻(1940年度)

第8巻は1940年4月号（第8巻第1号）から1941年3月号（第8巻第12号）まで通算12号発行されている⁽³⁶⁾。4月号は菊判120ページであり、前年4月号と同じである。

白秋による児童詩の選は1940年5月号で終わっている。これは、白秋の病気のためとみられる。ただし、白秋の選による児童詩が掲載されなくなって以降も10月号までは表紙上部に「千葉春雄・北原白秋・選・輯」の文字がある。11月号以降1941年2月号までの表紙は未見のため、白秋の名が外される時期を特定することはできないが、3月号では「千葉春雄・選・輯」と改められている。

(9) 第9巻(1941年度)

第9巻は1941年4月号（第9巻第1号）から1942年3月号（第9巻第12号）まで通算12号発行されたものとみられる⁽³⁷⁾。4月号は菊判114ページであり、前年4月号に比して6ページ減となっている。

1941年は国策によって雑誌が「一応廃刊を

命ぜられ、又は合併を懇請される等其の統合は頗る活発に着手され⁽³⁸⁾」た年である。『綴り方倶楽部』も、いったん廃刊届けを出させられたのち、他誌を買収・統合する形で続刊することとなる。『綴り方倶楽部』廃刊の届出、他社の雑誌の買収・統合、『綴り方倶楽部』続刊の確定に至る事情については千葉の日記に記されている⁽³⁹⁾。

「八月二十六日(略)警視庁によび出されて廃刊届を出させられる。(以下略)」

「十月七日(略)警視庁より電話あり。(中略)請書と譲渡証をもって来いといふ(以下略)」

「十月八日(略)請書譲渡書を清書し、先づ厚生閣へ行く。存外簡単に判コをもらい古閑へ行く。ここでも昼飯を御馳走になり、簡単に済みコロンビアに到り残六百を済し一切を了して警視庁へ。ここでも十分で済み、家へ(以下略)」

「十月十七日(略)諸方へ雑誌統制についての挨拶状をかく(以下略)」

こうした記述から、『綴り方倶楽部』はいったん警視庁に廃刊届を出した後、厚生閣(社長・岡本正一)、第一出版協会(社長・古閑停)、日本蓄音機商会(コロンビアレコードの製造発売元)の3社の雑誌を買収・統合するという手続きを経て続刊することになったということが判明する。日記には、買収資金として多額の資金を工面する過程についての記述も含まれている。

こうして『綴り方倶楽部』が続刊できるようになったことにかかわって1941年12月号には次のように書かれている。

「御存知の通り本誌も残ることになった。それにはそれだけの任務を背負はされてゐるのだから、十分の覚悟と努力によつて、本誌をして益々充実させていきたいと思つてゐる。それは毎号見て下さる方は分るとは思ふが、四月を期して一新するつもりだ。⁽⁴⁰⁾」

他誌を統合して存続するにあたって「それ

だけの任務を背負はされてゐる」ということが誌面にどのような変化をもたらしたかについて、7月号から10月号までは未見であるため、6月号と11月号を比較してみよう。6月号では従来通り綴方が巻頭に置かれていた。これは『綴り方倶楽部』が綴方と児童詩の雑誌であることを象徴するものであった。ところが11月号では大人の手による読み物が巻頭に置かれている。そして、その11月号には従来通り表紙上部に「千葉春雄・選・輯」の文字があるものの、1941年1月号になると外されている⁽⁴¹⁾。これらのことは、雑誌統合のなかで、『綴り方倶楽部』が綴方や児童詩の雑誌から読み物雑誌へ転換していくことを示すものであった。そして、こうした方向で「四月を期して一新」されることとなるのである。

(10) 第10巻(1942年度)

第10巻は『綴り方倶楽部』としてのものは1942年4月号(第10巻第1号)のみである。その4月号は菊判114ページであり、前年4月号と同じである。

同号には『学芸少国民』への改題を予告する次のような記事がある。

「綴り方倶楽部がいよいよ改題新発足をする!

諸君! 綴り方倶楽部の読者諸君!

諸君が五年から六年へ、六年から高一へ、或は中学へ新発足したやうに、わが綴り方倶楽部もいよいよ新発足をする。綴り方倶楽部にも卒業の時期が来たのだ。そしてその名もゆかしい『学芸少国民』とかはるのだ。もう倶楽部ではない学芸少国民だ。だから内容もまた今までとは大いに違ふ。下の予告を見給へ。諸君にとつて何よりも大事な研究の記事があり、歴史があり、徳永先生の小説がある、大いに誇れる内容だと思つてゐる。(以下略)⁽⁴²⁾」

この予告記事のとおり『綴り方倶楽部』は1942年4月号で終刊し、翌月には同誌の巻号

を継承した『学芸少国民』1942年5月号(第10巻第2号)が菊判114ページ、定価40銭で発行されている⁽⁴³⁾。

巻頭言には次のように書かれている。

「『綴り方倶楽部』改題に際して

今までは、諸君の文によつてさまざまな生活を考へ、そこからよい綴り方やよい生活に到達するやう、勉強して来ました。そして今度も、そのことに変わりはありませんが、これからは、かうならなければならぬといふ生活や、思想についても、もつともつと広く多方面に勉強して、今国を挙げて戦つてゐる国家の目的にびつたりとよりそひ、飛行機の翔ける方へ、砲弾の飛ぶ方へ、戦車の走る方へ力の限り強歩することにしようと思ひます。⁽⁴⁴⁾」

ここには、雑誌の性格の転換が明確に示されている。『綴り方倶楽部』が追求してきたものが「諸君の文によつてさまざまな生活を考へ、そこからよい綴り方やよい生活に到達するやう、勉強」することであったのに比して、『学芸少国民』は戦争遂行という「国家の目的」にそつて「かうならなければならぬといふ生活や、思想」へと子どもたちを動員する役割を担うこととなったのである。

おわりに

以上にみてきたことを総合すると、『綴り方倶楽部』は、第1巻から第4巻までは12号ずつ、第5巻は5号、第6巻は11号、第7巻は少なくとも10号、第8巻から第9巻までは12号ずつ、第10巻は1号発行された。通算すると、少なくとも99号(第7巻第11号が存在すれば100号)発行されたということになる。

同誌の改題後継誌『学芸少国民』について補足すると、同誌は1943年3月号(第10巻第12号)まで通算11号発行された。終刊号となった3月号は菊判82ページ定価35銭である。

2月号では再改題が予告されている。そして再改題の誌名については次のように『少国民』であるとされていた。

「われわれの学芸少国民も、昨年五月の出発以来、第十ヶ月目を迎えました。(中略)ところが、この学芸少国民が、いままた新しい出発をしようとしてゐます。来る四月、新学期を迎えるのを機会に、大活躍をしようといふわけです。『学芸少国民』といふ名も『少国民』とかはり、もつともつと諸君と仲良くなる考へです。(45)」

ところが、3月号の予告では再改題の誌名が『少国民文学』と改められるとともに、「編集を社団法人日本少国民文化協会が、発行を東宛書房がそれぞれ担任する」ものであるとして編集体制の変更も明らかにされている(46)。ただし、そこにおいても、『少国民文学』は子ども向け雑誌として紹介されていた。

ところが5月に実際に発行されたものは、日本少国民文化協会文学部会編集『少国民文学』1943年5月号(第11巻第1号)であった。同誌は「この雑誌の対象は、いふまでもなく、文学部会会員少国民文学志望者その他少国民指導者を主流とするもの(47)」であり、子どもを読者対象とするものではなかった。そして、1943年7月10日の千葉の病死により、『少国民文学』は1943年7月号(第11巻第3号)までの通算3号でもって終刊(48)となった。

註

- (1) 千葉春雄の経歴については、太郎良信著『生活綴方教育史の研究』(1990年、教育史料出版会)154~166ページ参照。
- (2) 波多野完治「つづり方の鬼」金子書房編集部編『生活綴方と作文教育』1952年、金子書房、251ページ。
- (3) 『日本出版百年史年表』(1968年、日本書籍出版協会)456ページによると、東宛書房の創業は1931年4月1日である。
- (4) 川口幸宏・太郎良信・中島和美編集『教育・国語教育』複刻版、全36巻・別巻1、1987~88年、『教育・国語教育』複刻版刊行委員会。
- (5) 北原白秋著『児童詩の本』(前出)には、各月の選評の前書き的な部分が削除されていたり、児童詩と選評の脱落(たとえば『綴り方倶楽部』1937年3月号81ページの「秋空」は作品・選評ともに脱落)があったりするなど、『綴り方倶楽部』誌上のものをそのまま再録したものとは言えない面がある。
- (6) 谷悦子「自由詩の特徴と変遷」北原隆太郎・関口安義編『自由詩のひらいた地平』1994年、久山社、91ページ。
- (7) 松本正勝「千葉春雄と『綴り方倶楽部』」『生活綴方と作文教育』(前出)。
- (8) 同上、280ページ。
- (9) 同上、278ページ。
- (10) 日本作文の会編『生活綴方事典』1958年、明治図書、585ページ。
- (11) 同上。
- (12) 同上。番号と下線は引用者。
- (13) 民間教育史料研究会編『民間教育史研究事典』1975年、評論社、256ページ。
- (14) 同前。番号と下線は引用者。
- (15) 『綴り方倶楽部』1933年7月号、89ページ。
- (16) 『民間教育史研究事典』(前出)256ページ。番号と下線は引用者。
- (17) 千葉春雄「創刊『綴り方倶楽部』について」『教育・国語教育』1933年2月号、143ページ。
- (18) 詳しくは、『生活綴方教育史の研究』(前出)179~180ページ参照。
- (19) 『綴り方倶楽部』1937年6月号の巻末に掲載された『綴り方雑誌』の広告には「綴り方倶楽部の親雑誌」というキャッチフレーズが用いられている。
- (20) 畑中圭一「児童詩をめぐる白秋と「生活詩」派」『自由詩のひらいた地平』(前出)。
- (21) 同上、109ページ。番号と下線は引用

- 者。
- (22) 寒川道夫は「百田氏の選評に不満がもたらされ、生活課題詩の提案が行われた。(中略)そこで百田氏の選とは別に、国分一太郎、近藤益雄、さがわ・みちおによって輪番に選詩が行われた」(さがわ・みちお「児童生活詩小史」日本児童生活詩読本編集委員会編『児童生活詩の理論と実践』1953年、青銅社、17ページ)と、寒川も「課題詩」の選者であったかのように記したことがある。しかし寒川が『綴り方倶楽部』の児童詩の選を担当するのは、白秋が選者を降りた後のことである。『綴り方倶楽部』1941年3月号に寒川の選があるのは、その一例である。
- (23) 筆者は『綴り方倶楽部』の書誌について若干ながら言及したことがある。太郎良信「『綴り方倶楽部』と生活綴方教師たち」(『自由詩のひらいた地平』(前出)所収)参照。
- (24) 「くらぶのポスト」『綴り方倶楽部』1933年5月号、113ページ。
- (25) 「御投稿についてのお願ひ二三」『綴り方倶楽部』1934年10月号、127ページ。
- (26) 「くらぶのポスト」『綴り方倶楽部』1935年4月号、144ページ。
- (27) 『綴り方倶楽部』1935年11月号、128ページ。
- (28) 休刊が7月号からであったということについて復刊後の『綴り方倶楽部』の誌上で確認することは難しい。ここでは『児童詩の本』(前出)の「昭和十二年」の項に「七月 - 十三年一月まで休刊」(316ページ)とあることを示しておく。
- (29) 千葉春雄「記念すべき巻頭言」『綴り方雑誌』1937年6月号(第1巻第1号)1ページ。
- (30) 「編集後記」『綴り方倶楽部』1938年2月号、104ページ。
- (31) 『児童詩の本』(前出)は、1938年2月号を「第五巻・第十一号」(318ページ)、3月号を「第五巻・第十二号」(325ページ)と、7ヶ月間の休刊がなかったかのような巻号を付している。
- (32) 「編集後記」『綴り方倶楽部』1938年11月号、112ページ。
- (33) 『児童詩の本』(前出)は表紙の巻号表記を採用している。その結果、1939年の「十月 第七巻・第十号」(460ページ)と1940年の「二月 第七巻・第十号」(474ページ)というように「第七巻・第十号」が2種あることとなっている。
- (34) 「編集後記」『綴り方倶楽部』1940年2月号、120ページ。
- (35) 千葉春雄「私信12」『綴り方倶楽部』1939年5月号、119ページ。
- (36) 12号のうち現本で確認できるのは1941年3月号(第8巻第12号)を含めて5号分にとどまるが、部分的なスクラップ(個人蔵)を含めれば12号すべてを確認できる。
- (37) 12号のうち現本で確認できるのは1942年3月号(第9巻第12号)を含めて4号分にとどまるが、部分的なスクラップ(個人蔵)を含めれば9号分が確認できる。
- (38) 『出版年鑑 昭和16年度版』1941年、東京堂、9ページ。
- (39) ここでの引用は千葉春雄自筆の日記に依拠している。中川正人氏(仙台市博物館市史編纂室)の発掘・資料提供による。
- (40) 「編集後記」『綴り方倶楽部』1941年12月号、114ページ。これはスクラップ(個人蔵)による。下線は引用者。
- (41) 1941年12月号の表紙は未確認のため、表紙に「千葉春雄・選・輯」の文字があったか否かは不明である。
- (42) 『綴り方倶楽部』1942年4月号、80ページ。なお『日本出版年鑑 昭和18年度

版』(1943年,協同出版社)は,日本出版文化協会が『キンダーブック』に対して『ミクニノコども』への「誌名の改題を要求した」こと等を例として「文化統制の意志表示」であることを述べる際に,協会の「要求」によってではなく「自己の都合により改題を申し出たものに『綴方倶楽部』(『学芸少国民』と改題)がある」として『綴り方倶楽部』の改題に言及している(96ページ).

- (43)『学芸少国民』はこれまでその存在すら確かめられてはこなかった.たとえば滑川道夫は「『綴方倶楽部』は,他の雑誌と合併して『学芸少国民』として生き残っていたのではないかと思われる.『学芸少国民』なる雑誌を未見であるからこの点断言できない」(『少国民文学』の性格)『少国民文化』複製版第7巻,1991年,エムティ出版,4ページ)と述べている.
- (44)『学芸少国民』1942年5月号,1ページ.
- (45)「あとがき」『学芸少国民』1943年2月号,82ページ.
- (46)「お知らせ」『学芸少国民』1943年47~48ページ.
- (47)二反長幹事「編集後記」『少国民文学』1943年6月号,64ページ.
- (48)『少国民文学』全3号は『少国民文化』複製版第7巻(前出)所収.